

ガラテヤの信徒への手紙 1 章 10～24 節

2019 年 9 月 25 日

古本 靖久

1、聖歌 341 番 「愛の聖霊よ われら用いて」

2、お祈り

3、聖書輪読 （新約聖書 342 ページ）

4、今日の内容

前回の箇所パウロは自らの使徒性を強調し、そして自分が伝えたのとは違う「異なる福音」に傾倒している人たちに、「呪われよ」と告げます。

パウロが伝えたのは、行いなどによらず救われるという福音でしたが、「異なる福音」とは割礼を施したり律法を守ったりすることによって救われるという、行動を伴うものでした。

導入	1 : 1～5	挨拶
	1 : 6～9	異なる福音
福音の啓示	1 : 10～12	神から示された福音
	1 : 13～24	啓示の前後
	2 : 1～10	エルサレム使徒会議
	2 : 11～14	ペトロ批判
	2 : 15～21	信仰による義

ここからパウロは自分が伝える福音を正当化するために、自分は神さまから直接啓示を受けたのだということを伝えます。人から与えられたものではなく、神さまから与えられたものだというのです。ではパウロはこれらのことを、どのようにガラテヤの信徒の人たちに伝えたのでしょうか。

5、節ごとに

◆神から示された福音

1:10 ~~こんなことを言って、~~（つまり）今わたしは人に取り入ろう（を説得しよう）として
いるのでしょうか。それとも、神に取り入ろうとしているのでしょうか。あるいは、
何とかして人の（に）気に入る（られよ）うとあくせくして（求めて）いるのでしょ
うか。もし、今なお人の気に入ろうとしているなら、わたしはキリストの僕ではありません。

「説得する」という言葉は、具体的にどういうことを指すのでしょうか。この言葉は文脈によって、肯定的にも否定的にも用いられます。「認めさせる」、「喜ばせる」、「言いくるめる」などという意味で捉えることのできる言葉です。

パウロは人々を説得し、人に気に入られることを求めていたのでしょうか。そうではないようです。パウロが求めたのは、人からの評価ではなかったのです。パウロは、神さまを説得しようとしていました。

このときの「説得する」は「喜ばせる」というニュアンスで考えた方がよいようです。パウロの行動原理は、神さまを喜ばせることにありました。それは主人と僕（直訳だと奴隷）という関係の中で、神さまに仕えるということです。人に気に入られようとしていると、神さまのことを二の次にしてしまうということなのではないでしょうか。

1:11-12 （なぜなら）兄弟たち、（わたしは）あなたがたにはつきり言いません（知らしめている）。わたしが告げ知らせた福音は、人によるものではありません。わたし（こそ）はこの福音を人から受けたのでも教えられたのでもなく、イエス・キリストの啓示によって知らされた（な）のです。

さらにパウロは、自分が告げ知らせしている福音は、人によるものではなく直接啓示されたものだと言います。人によらないとは、パウロ自身の人間的な考察から出ていないという意味と、人から継承されたものではないという意味とがあります。どちらにしても、その根底には「人間の思い」は入っていません。

パウロは福音を、イエス・キリストの啓示によって知りました。啓示とは、幻や夢などにより、隠されていたことが明らかにされることです。パウロはダマスコの途上で、復活のイエス様に出会いました。そのときに彼は変えられました。

「わたしは、あなたが迫害しているイエスである。起きて町に入れ。そうすれば、あなたのがすべきことが知らされる」とイエス様に告げられ、目が開かれたときに、福音が啓示されたのです。

<ここまでの箇所から>

ルカ 16 章 13 節に、このような言葉があります。「どんな召し使いも二人の主人に仕えることはできない。一方を憎んで他方を愛するか、一方に親しんで他方を軽んじるか、どちらかである。あなたがたは、神と富とに仕えることはできない。」

パウロは、「正統な権威（エルサレムの権威）に依拠していない」ことを、批判されてきました。しかしパウロは、人ではなく神によって立てられたことを強調します。それではわたしたちは、人や富ではなく神さまにのみ目を向けているのでしょうか。

1:13-14 (つまり) あなたがたは、わたしがかつてユダヤ教徒として (において) どのようにふるまっていたかを聞いています。わたしは、徹底的に (度を超えて) 神の教会を迫害し、滅ぼそうとしていました。また、先祖からの伝承を守るのに (について) 人一倍熱心で、同胞の間では同七年ごろ (世代) の多くの者よりもユダヤ教に徹しようとして (関して前を進んで) いました。

パウロはこの2節で、啓示を受ける前の自分の姿について振り返ります。パウロはユダヤ教に忠実であるが余り、教会を迫害していました。ただしこの当時、キリスト教はユダヤ教の一派 (ナザレ派) と考えられていたようです。キリスト教とユダヤ教とは、明確に分離されていたわけではありませんでした。

したがってパウロが迫害していたのは、いわゆる「異邦人教会」だったと思われます。パウロが召命を受けたダマスコも、異邦人の教会が多くある地域でした。律法や伝承 (言い伝え) を守ることに熱心だったパウロには、異邦人教会の人たちが律法をないがしろにしているように映ったのだと思います。

教会を迫害してきたということは、パウロにとって恥ずべき過去だったでしょう。しかしパウロはその事実を隠すことも、否定することもしません。自分が神さまによって、180度向きを変えられたことを伝えていきます。

1:15-17 しかし、わたしを母の胎内にあるときから選び分け、恵みによって召し出して (呼んで) くださった神が、御心のままに (喜んで)、御子をわたし (の内) に (啓示して、その福音を異邦人に告げ知らせるようにされたとき、わたしは、すぐ血肉に相談するようなことはせず、また、エルサレムに上って、わたしより先に使徒として召された人たちのもとに行くこともせず、(むしろ) アラビアに退いて、そこから再びダマスコに戻ったのでした。

次にパウロは、自らの啓示について語ります。「わたしを母の胎内にあるときから選び分け」という言葉は、パウロの選びと召しが、神さまの計画だったことを示唆します。旧約の預言者の召命物語にも、同じような記述がみられます。

島々よ、わたしに聞け 遠い国々よ、耳を傾けよ。主は母の胎にあるわたしを呼び 母の腹にあるわたしの名を呼ばれた。(イザヤ書 49 章 1 節)

「わたしはあなたを母の胎内に造る前から あなたを知っていた。母の胎から生まれる前にわたしはあなたを聖別し 諸国民の預言者として立てた。」(エレミヤ書 1 章 5 節)

つづいてパウロは啓示の出来事を語りますが、使徒言行録 9 章の記述と比較すると、非常に簡潔に語っています。

「神が喜んで、御子をわたしの内に啓示して、その福音を異邦人に告げ知らせるようにされた」、という報告には、「見る」という視覚表現はみられません。むしろ「わたしの内」という言葉により、この体験の内面性を強調します。

パウロが自分の回心物語を、使徒言行録に見られるような（ある意味）劇的な物語として語らず、内面的な（目に見えない）物語として伝えることは、復活のキリストとの出会いは誰にでも起こりうるものなのだということを伝えたかったのかもしれませんが。

そして啓示の直後、パウロはアラビアに退き、ダマスコに戻ります。アラビアはユダヤ属州の東の境界線の向こう側で、シリアの下に位置する広大な地域です。異邦人が多く住む異教の地でした。またダマスコにはユダヤ人がまとまって住んでいる地域もありましたが、多くは異邦人でした。

つまりパウロはエルサレムのようにユダヤ人が多くいるような場所ではなく、異邦人の中に身を置きながら、福音理解を深めていったのです。ユダヤ教の指導者や使徒たちに教を乞うことはなかった。これがパウロが「人によるものではない」と断言する根拠なのです。

1:18-19 それから三年後、ケファと知り合いになろうとして（を訪問するため）エルサレムに上り、十五日間彼のもとに滞在しましたが、ほかの使徒にはだれにも会わず、（いませんでした。）ただ主の兄弟ヤコブにだけ会いました（以外は）。

パウロは啓示を受け、福音の理解を深め、そしてエルサレムに行くまでに、3年という時間をかけます。その間パウロは、自らに与えられた召命と向きあい、福音に対する独自の考えを確立させていきます。この「3年」という言葉の中にも、「自分はエルサレムに行って福音を教えられたのではない」という思いが見えます。

そしてパウロは、エルサレムに上り、ケファを訪問します。ケファというのはペトロ（ギリシア語）のアラム語名で、「岩」を意味します。新約聖書の中でペトロのことを「ケファ」と呼ぶのは、パウロだけです。

パウロの目的は、ペトロと仲良くしようということではありませんでした。まして教を受けに行ったわけでもありません。イエス様が地上の生涯の中で、何を語り何をなされたのか、ペトロから興味深く聞いたのかもしれませんが。

パウロは、福音をペトロから教わったわけではありません。イエス様の兄弟ヤコブ以外の使徒とも会わなかったと言います。ちなみにイエス様の兄弟ヤコブは、12使徒には数えられていませんでした。

1:20 わたしが（は）このように（あなたたちに）書いていることは（くが）、（見よ、）神の御前で断言しますが、（わたしは）うそをついているのではありません（いない）。

パウロがここで「うそではない」と言っていることは、ペトロと主の兄弟ヤコブ以外の使徒に会わなかったということかもしれません。エルサレムの使徒とは、ペトロとヤコブでさえたかだか15日間一緒にいただけの関係であり、他とは面識すらないということが、すべてを神さまに依拠する彼にとってはとても大事なことだったのです。

「神の御前で」と書く背景には、「あなたたちは盗んではならない。うそをついてはならない。互いに欺いてはならない。」（レビ記19章11節）にある十戒の規定があります。神さまの前で証言することで、パウロは自分の正当性を強めていくのです。

1:21-22 その後、わたしはシリアおよびキリキアの（諸）地方へ行きました。キリストに結ばれている（ある）ユダヤの諸教会の人々と（に）は、（わたしは）顔見（を）知りではあり（られてい）ませんでした。

シリアとキリキアは、紀元前67年と64年にローマ軍に侵略された地域です。地図で分かる通り、エルサレムからは遠く離れています。

つまりパウロは、エルサレムに15日間滞在した後、またユダヤを離れたのです。異邦人のいる場所に、また向かったのです。この移動については、使徒言行録9章23～30節にも同じように書かれています。



ユダヤの教会にいる人たちに、パウロが顔を知られることはありませんでした。面識がなかったことを意味しますが、ここでもエルサレム滞在がいかに短かったかを述べているのです。

ただパウロは、ユダヤの諸教会をないがしろにしたわけでも、低く見ているわけでもありません。それは彼の「キリストにあるユダヤの諸教会」という言い方からも伝わってきます。彼にとって大切なのは、自分が異邦人宣教に召されたことなのです。

1:23-24 ただ彼らは、「かつて我々を迫害した者が、あの当時（かつて）滅ぼそうとしていた信仰を、今は福音として告げ知らせている」と聞いて、わたしのことで神をほめたたえておりました。

パウロはユダヤの教会とは面識がありませんでした。しかし、「ただ」と例外的な事実を告げます。それはユダヤの教会の人たちが、神さまをほめたたえているということです。

パウロが滅ぼそうとした「信仰」とは何でしょう。この言葉は「信頼」や「信」とも訳せます。パウロは教会にある「信頼関係」を壊そうとしたのかもしれませんが、その「信頼」とは、神さまとキリストとの、キリスト者の信頼関係のことです。神さまとの関係性を崩していく行為を迫害と呼ぶとき、映画や小説の「沈黙」で描かれた「転ぶ」という棄教の場面が、迫害と強く結びつくように感じます。

しかしパウロは変わりました。それもまるっきり逆方向に、方向転換しました。「悔い改める」という言葉は、180度向きを変えるという意味があります。パウロは人ではなく、神さまに対して向き直りました。その働きをみて、キリスト者は驚き、動揺し、そして神さまをほめたたえたのです。

<今日の箇所から>

パウロは自らの土台は神さまにあると、強く伝えました。ユダヤ教ではラビという教師から、律法や伝承などを詳しく教わっていきます。初期のキリスト教はユダヤ教を土台としており、使徒の教えなどが重要視されていました。しかしパウロは、そこに人間的な思いが入り込むことで、本当の福音とは違ったものになってしまうと考えたのかもしれませんが。

昔、説教の勉強をしているときに、これだけはしてはならないと言われたことがあります。それは説教を通じて、人を非難することです。たとえば「隣人を愛しなさい」という箇所から語るときに、「この前、こんな人がいました」と会衆席にいる人のことを言う。

そこにどんな思いがあろうとも、その言葉は神の言葉ではなく、説教者の思いになってしまうのだと、その先生は言われました。確かにそうだと思います。

神さまはわたしたちに何を語り掛け、わたしたちをどのように思っておられるのか。わたしたちも直接心に感じていたらと思います。

今回の学びは、これで終わります。次回は10月17日(木)10時30分～で、「エルサレム使徒会議（ガラテヤ2：1～10）」について学んでいきたいと思ひます。